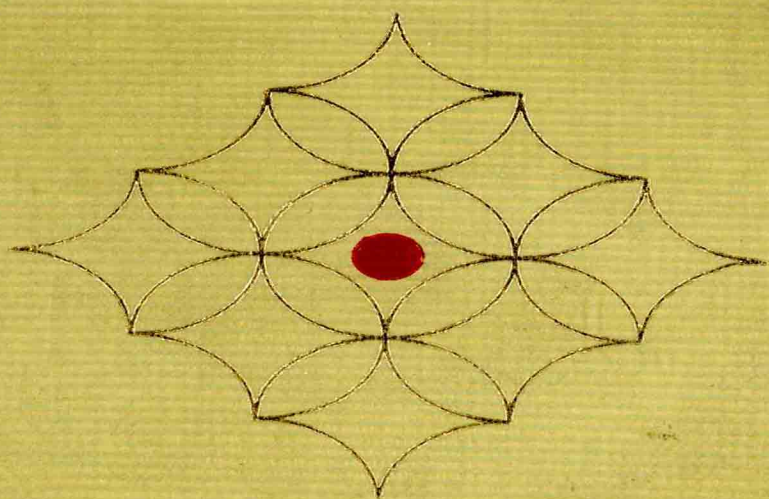




現代日本文學大系

57

中野重治集  
佐多稲子



筑摩書房

現代日本文學大系 57

昭和四十五年六月五日  
昭和四十八年十月三十日

初版第一刷発行  
初版第二刷発行

中野重治・佐多稻子集

著者

発行者

発行所

中野重治  
佐多稲子  
井上達三

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一二二三

印刷株式会社 精興社

製本株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10057 (出版社) 4604

中野重治集 目次

卷頭写真

筆蹟

中野重治詩集

春さきの風

村の家

歌のわかれ

空想家とシナリオ

五勺の酒

第三班長と木島一等兵

広重

萩のもんかきや

三

元

四

四

五

五

一

五

二

藝術に関する走り書的覚え書

一六

いわゆる藝術の大衆化論の誤りについて

一七

素樸ということ

一七

藝術に政治的価値なんてものはない

一八

ねちねちした進み方の必要

一九

子供のための文学のこと

二〇

第二『文学界』・『日本浪漫派』などについて

二〇

ハイネの橋

二〇

## 佐多稻子集 目次

巻頭写真

筆 蹟

素足の娘

二九

灰色の午後

三〇四

〔付録〕

プロレタリア文学

中野重治 六一  
高見順

『驢馬』の人達

室生犀星 三九〇

中野重治論

平野謙 三九五

「くれない」の作者に事よせて

中野重治 四〇九

佐多稲子の姿勢

花田清輝 四一四

年譜

四三

著作目録

四三

中野重治集

「方々昔、<sup>曰</sup>柯公全集」といふ東坡の本が  
世にこのあつたことや、金玉英が六卷  
かのうち三巻くらいしか出たようであるとい  
つた程々の記憶しか私はある。

十年まえ私から書いたのはすぢかつた  
た。そのときは時よゝ人から教えられた。全集  
は五巻以下で完結してゐた。といふ。柯公追  
悼文集の一冊がついてゐた。三月四日記

## 中野重治詩集

## 大道の人々

どこからともなく彼らはやって来た

弱った紋つきの男は高島易断の人相見を始め

た

紙をひろげて悪い人相を書いて人々に示した  
一つの横顔を上から下へ書いていった

しかし眉や目や口などは

前から見たところを書いていった

彼はうすっぺらな書冊をひらひらさせた

そのなかに人の一生の運命が細大もらさず書

いてあるといった

それを読めば成功うたがいないといった

けれどもそれを売る彼は弱った紋つきを着て

いた

角帽に袴をつけた若い男は医業分業改正案を

叫んでいた

彼は医者をつくる薬がどんなものであるかを

発いて見せた

彼は一枚の紙を示してこれが処方箋だといっ

た

彼をかこむ群集の間から手が出てそれを買  
とった

並樹の桜の下に毛布をしいた角刈の男は手品

をはじめた

おしまいに彼は自分の鼻の孔へ釘をうちこみ

はじめた

長い光る五寸釘を鼻の孔に入れて下駄でかん

かんたいた

釘はすこしずつ中へはいっていった

うちこんでしまおうと彼はふがふがといつて見

せた

そういうあぶなっかしい藝がはじまるまで見

物は立っていた

しかしそういう藝がすむと見物はそろそろ歩

きだした

大ていは一銭の銭もほうらずに黙って歩きだ

した

四辻には猿曳がいた

小さな太鼓をたたきながらときどき猿を手元

へひきよせた

見物のなげた芋の皮を猿はまたたきしながら

器用にたべた

今日はおひがんの中日だ

たくさんお貰いしろ

猿曳が猿の顔も見ないでどなった

どこからともなく彼らはやって来た

数知れずやって来た

砥石

安全剃刀

キンの指輪

おっとせい 蘇鉄の果

夜は夜で朝鮮飴

それからくじびき

彼らは一樣にくろい顔をしていた

キンの入れ歯をしていた

あるものは暑いさなかによごれた袴を着てい

た

あるものは木枯しのなかに麻裏草履で立って

いた

どこからともなく彼らはやって来た

そしてどこかしらこっそりと帰って行った

昼となく夜となく彼らはやって来た

そしてピストルを射ったり大声に叫んだりし

て人を集めた

ここから内らへはいってはいけないといつて

杖で円をかいだ

べらべらとしっきりなしにしゃべり続けた

見物が笑って見ていくれるとき

自分がよどみなくしゃべり続けられるとき

そのときが彼自身もつとも幸福であるかのよ

うに

見物が散ってしまったり

見物の集まり具合が思わしくなかったりする

と

彼らはとなりのやはりそのような男に話しか

けた

その僅かな言葉は

通りすがりの人の耳にあわれにひびいた

寒い地方 暑い地方

諸国をまわって来たその僅かな言葉は

その季節々々の風のなかにあわれにしがれ

て消えていった

## 浦島太郎

今宵は雨がふって

ついその家ではまた蓄音機をはじめた

童女がはかなげな声をはりあげて浦島太郎を

うたうのだ

浦島太郎は亀にのり……

乙姫様のお氣に入り……

白がのじじいとなりにけり

お前もうたってごらん

そしてこれは誰のことをうたったものか教え

てくれ

## しらなみ

ここにあるのは荒れはてた細ながい磯だ  
うねりは遙かな沖なかにわいて

よりあいながら寄せて来る

そしてこの渚に

さびしい声をあげ

秋の姿でたおれかかる

そのひびきは奥ぶかく

せまった山の根にかなしく反響する

がんばりような汽車さえもためらいがちに

しぶきは窓がらすに霧のようにもまつわって

来る

ああ 越後のくに 親しらず市振の海岸

ひるがえる白浪のひまに

旅の心はひえびえとしめりをおびてくるのだ

## 爪はまだあるか

お前は

ひろい臉をまど

その陰からいつまでもものぞいていた

お前は

そのあいだじゅう爪を噛み

つばきはお前の指さをぬらした  
爪はまだあるか

お前の倅をたずねてわたしは鏡のなかに目を  
つぶる

わたしの臉は美しいあのかあてんのようにでな

い

わたしは十本の指をのばして一枚々に爪を

しらべる

爪のおもては曇って

衰しくれないの色が浮んでいない

それにわたしの爪は

恐らくおいしくはないだろう

爪は お前の爪はまだあるか

## あかるい娘ら

わたしの心はかなしいのに

ひろい運動場には白い線がひかれ

あかるい娘たちがとびはねている

わたしの心はかなしいのに

娘たちはみなふくらと肥えていて

手足の色は

白くあるいはあわあわしい栗色をしている

そのきゃしゃな踵などは

ちようど鹿のようだ

## 眼のなかに

眼のなかにまっかな斑点があらわれた  
 青味をおびたうす黄いろの白地に  
 朝やけのように美しくかたまって  
 しくしく泣いているようだ  
 がらすのすばいといで辛い目薬をたらし  
 しずかに見ていると  
 女を愛するような哀しい思いが湧いて来る

## 挿木をする

今日は三月二十三日  
 仄かにこな雪がちらついて  
 あたたかな春の彼岸の中日です  
 おいで妹たち  
 僕らは挿木をしよう  
 祖父さんやそのまたお祖父さんたちがやった  
 ように  
 今日のはとけの日で挿木の日だ  
 雪は僕らの髪の毛にかかろう  
 そして挿木はみずみずと根をさそう

## わかれ

あなたは黒髪をむすんで  
 やさしい日本のきものを着ていた  
 あなたはわたしの膝の上に  
 その大きな眼を花のようにひらき  
 またしずかに閉じた

あなたのやさしいからだを  
 わたしは両手に高くさしあげた  
 あなたはあなたのからだの悲しい重量を知っ  
 ていますか

それはわたしの両手をつたって  
 したたりのようにひびいて来たのです  
 両手をさしのべ眼をつむって  
 わたしはその沁みてゆくのを聞いていたので  
 す  
 したたりのように沁みてゆくのを

## たんぼの女

そうです

何というおだやかな日和でしょう  
 空はすっかり晴れあがって黒い鵜が渡って来

る

そしてたんぼに 稲の荊株にはひこばえが生  
 じ

そこにあなた方は坐っている  
 あなた方は三人 小さな筵の上で話をしてい  
 る

そして通りすがりの私に向っていかにもなつ  
 かしげに言葉をかけてくる

たんぼに坐っている三人のやさしい女の人  
 私もそこへまじりに行きたい  
 そこへ行ってそこに坐って  
 その特別な話が聞いてみたい  
 けれどもあなた方

あなた方は遊女でわたしは生徒です  
 えええ ほんとに穏かな日和ですよ  
 ここはなわて路です あなたの方の街の裏の細  
 い一本のたんぼ路です

私もそこへ気さくにまじりに行きたいのです  
 それなのに私は帰らねばならぬのです

さよなら たんぼの女の人  
 私はほほ笑みを一つ返します

たと日光をお吸いなさい  
 たんときれいな空気をお吸いなさい  
 私はもう帰ります

さよなら たんぼの人 たんぼの三人のあな  
 た方

## 私は月をながめ

私は月をながめ

お前のことを考える

私はお前に逢いたい

月は中空にあんなに光っている

そして私は思ひ出す

私の足の下を掘ってゆくならばお前の国へ出る  
ということ

私の足の下にお前はさかしまになって歩いて  
いる

お前と私とはおなじ月を眺めることができない  
い

雲のない満月もあかい月蝕もひとつも見られ  
ない

月の光もお前と私とを一しよに照らすことは  
ようしない

対蹠のくに

なんという遠方だろう

私は月をながめ

私はお前に逢いたいのである

## 今日も

通りには今日も大勢の女がいて  
きらびやかな口をきいていた  
みんな行く先があるのか

あかい耳朶みみづこをして手をふって  
ずんずん私はおい越された

このひろい東京の町にお前がいらない  
このひろい東京の町にお前がいらないというの  
はつまりどうということなのだろう

あんな女どもにさえおい越されて  
朝から

心をはりつめてはりつめ  
顔をあおくして行く先がない

## 水辺を去る

私はこのしずかな水辺を去りましよう

今日は水さえも私をいとうている

水の心はおとなしい故

それとみずからは言い出さない

ただ私が向うの方へ行くならば

水は彼自身のしめやかな歌をうたい始めるで  
しょう

私はしずかなこの水辺を去りましよう

水がそれを乞うているようです

## 夜が静かなので

何事も意にまかせず空しく六十になる父のか  
なしみ

髭ひげなどは白くなって軀いびきをかいて眠っている  
大きな不幸でも来るようでしょっちゅう心配

でならぬ母のかなしみが  
晩にはいった風呂のせいで頬のとがりにあわ

れな赤味をさして  
口をあいて眠っている

その母に抱かれるようにして  
その母とさつき泣き泣きいさかいをした

すこし正直すぎる出戻りの姉娘のかなしみが  
眠っている

みんな炬燵かまどにはいつて眠っている  
向うではまだ稚いかなしみが二つ

一つは物ごころがつきそめて  
一つは何やら何もわからず

おなじ夜着のなかでもう眠入ねいりってしまった  
そしてこのうからやからを担いで行かねばな

らぬ息子のかなしみが  
どうやら火鉢を撫でながらまだ眼をあいてい

る

息子のかなしみはさっき昆布茶を飲んだ  
ことというのは汽車にひかれた隣りのびっ

こ猫だ

庭さきを通るのはあれは風だ  
もう二日もすればまた正月である

息子よ

今夜あたしは

そのおろかな記憶をすこし甘やかしてやれ

## ぼろ切

こんな古い麻の葉模様なんぞは棄ててしまおう

もうおれには

こんな古いぼろ切を大事にしてしまっておく

のが恥しくなってきた

ぼろぼと一しよにして

三国の浜へ持って行ってさっぱりと流して来ることだ

おれはうんと飯を食って

それから躰をかいて眠ってやろう

人の心のなかへ降りて行くのはもう止んだ

こんどは浮きあがる番だ

さあ浮きあがれうかべ

このやくざな心臓にささらをかけて

## はたきを贈る

大学前の一軒の荒物屋の店さきに吊してあったのだ

金五銭だったのだ

領にさすわけにもいかなかった

腰にさすのはばかられた

おれはその白いふさふさを

通りにいる子供の顔にさしつけてやった

そしてくるくると廻してやった

すると白いふさふさの間で

丸めた眼や細めた眼やのたくさんの笑いが花

咲いた

ある笑いの如きはよろこびに揺られて逃げて

行った

君は知っていよう

東京というところは兇悪な都会だ

その兇悪さは 影のように忍びこんで来る煤

やほこりに映じている

それに君は毎日 君の生活を あれらの判任

官どもの間ですりへらしている

そしてそのために君の言葉は粗くなってくる

のだ

見たまえ

これは繊維の濃かな哀しい日本紙の手ざわり

だ

そしてこれには無邪な少年の笑いの祝福が匂

っている

美しい日曜の朝に君の部屋の掃除をして

この清浄な白いふさふさでもって

君は君の書物や机のあたりを払いたまえ

君の心にふりかかって来る煤とほこりとを払

いたまえ

そしてしとやかな言葉づかいで静かな半日を

憩みたまえ

## 噴水のように

そいつらのいるのは煙のような遠方で

お前はその方角を指さすことさえできない

そいつらを呼びよせようにも

お前の息は短いし お前の咽喉はもう紅く

はない

そしてそいつらはどれもこれも

みんな些細なめめしい記憶なのではないか

そんなものにいつまでもかかり合っていよう

ものなら

お前の感情は間もなく古びてしまうだろう

そうだ こんなものにかかり合っているうち

には……

ただそいつらはどれもこれも

めめしい けれど金の色をした記憶なのだ

それが金の色をしているというばかりにおれ

は

胸を疼かしたりしていまだに棄てきれないで

いるのだ

日本の冬の夜は酒の糟<sup>かす</sup>売りが来て寒い  
 そしておれの皮膚は彼自身の淋しさを感じる  
 こんな骨身にこたえる寒い夜には  
 この馬鹿らしい記憶なぞはしぶきに散らして  
 夜の噴水のように ぼろぼ  
 ろい

## 蠅

厠<sup>かみや</sup>のなかにはものうい秋の陽<sup>ひ</sup>がたまっていて  
 女はどこにいるのか消息もなかった  
 黒い一匹の蠅<sup>は</sup>がいてうろろしていたが  
 最後におれの下腹のあたりに取りついた  
 おれは手をあげてそれを払ったが  
 おれは腹が立って悲しかった

## 垣根にそうて

今こそわかった  
 あの少年のように おれも誰かに小包が送り  
 たかったのだ  
 それがわからないばかりに おれの顔色も  
 うさつきからこんなに汚<sup>きた</sup>く濁<sup>な</sup>っていたのだ

少年は垣根にそうて歩いて来る  
 あの少年のようにおれも……

その黄いろい色をした香<sup>か</sup>いのする油紙におれ  
 は新しい折<sup>は</sup>みをつけよう  
 紐<sup>ひも</sup>を切るとき鉄<sup>てつ</sup>はさわやかに鳴るだろう  
 そしてその六面体の重量にはおれの好意が換  
 算してあるのだ

その快適な重量は彼の手をやさしくおさえる  
 だろう  
 額<sup>かぶ</sup>をかがやかして彼はいうだろう  
 や どうも

そこで郵便屋の心が

はればれと朝のように美しく晴れあがるのだ  
 ここから彼へ 郵便屋をとおって

一すじの幸福が虹のようにかかるのが

君 見えないか

これから帰っておれは  
 早速誰かに手頃な小包を一つ送らねばならぬ

## 最後の箱

なんとという愚<sup>おろ</sup>かなやつだろう  
 おれはそれを高い道路に坐<sup>ま</sup>って見ていたのだ  
 機関車をはじめかの箱どもが  
 どっしりした重量をはらんで車輪の音をひび  
 かせて行くのに

そいつはごろごろという音を立ててひっぱら  
 れて行くのだ  
 四角な黒い図<sup>ず</sup>体<sup>たい</sup>をして

なかには荷物も何もはいつてないのに違いな  
 い

ごろごろといっていちばんあとから蹠<sup>ふ</sup>いて行  
 くのだ

前の箱の腰のところにつかまってどこまでも  
 どこまでも蹠<sup>ふ</sup>いて行くのだ

もう五時間もたてば どこか遠い田舎<sup>いなか</sup>の線路  
 の上を

あいつはやはりあんな恰好<sup>かっこう</sup>をして走っている  
 のだろう

なんとという愚<sup>おろ</sup>かな奴<sup>やつ</sup>だろう

あいつの愚<sup>おろ</sup>かな姿を見送っているうちに

おれは少しずつ悲しくなってきた

数えていたその貨物列車の箱数を忘れてしま  
 った

## 夜の挨拶

また夜が来た  
 壁の上の影法師君  
 夜がまた来たのだ  
 ぼくはちょっと行って来る  
 あすこへ行<sup>い</sup>ってちょっと一ぱい<sup>い</sup>の<sup>い</sup>んで来る  
 壁の上の兄弟

退屈だらうが  
 しばらく独りひとで我慢してくれたまえ  
 ぼくはじきに帰かへって来る  
 そして帰かへった上でならそれは君  
 君はまたいつものように  
 ぼくを泣かしてあすばいいだろう  
 君の膝ひざのところ  
 ぼくは大人おとなしく泣いていようから  
 では君 壁かべの上の兄弟  
 ぼくはちよっと行いって来きます

## 女西洋人

どこの国の人だろうなあ  
 あの人はいいいことをしたんだがなあ  
 なんだあんなに赧あはい顔かほなんぞするんだろうな  
 あ  
 汽車のがらす窓は随分と重いんだし  
 あのお婆おばさんはその締め方を知らないんだも  
 のなあ  
 それを見兼ねてつい締めてやっただけのこと  
 だものなあ  
 なんだあんなに顔の下の方から赧あはくなんぞな  
 るんだろうなあ  
 もうずっと上の方まで顔いちめんにまっかだ  
 がなあ  
 親切をしてやったことがあの人には恥はしいの

## 浪

かなあ  
 それともお婆おばさんがなんぼやっても駄目だっ  
 たことが  
 あんまり造作さくさくもなくそして人の眼の前ででき  
 てしまったので  
 まだ年の若いらしいあの人はいきまりがわるい  
 とでもないのかなあ  
 それに  
 これはまたどうしたというんだろうなあ  
 あの人ひとの赧あはくなるのを見ているうちに  
 おれは少しづつ悲かなしくなってきたがなあ  
 少し寒いようで少し恥はしいようで……  
 どうしておれにはこんな事がいつもいつも悲  
 しいんだろうかなあ  
 おれやひょっとどうかなってしまふんじゃあ  
 るまいかなあ

## 煙草屋

夕ゆふがたになってもまだくずれている  
 浪はこの磯いそにくずれている  
 この磯は向うの磯につづいている  
 それからずっと北の方につづいている  
 ずっと南の方にもつづいている  
 北の方にも国がある  
 南の方にも国がある  
 そして海岸がある  
 浪はそこでもくずれている  
 ここからつづいていてくずれている  
 そこでも浪は走はしって来てだまってくずれてい  
 る  
 浪は朝からくずれている  
 浪は頭の方からくずれている  
 夕ゆふがたになってもまだくずれている  
 風が吹ふいている  
 人も犬もいない  
 その煙草屋はお寺のとなりにある  
 美しい神さんがいて  
 煙草の差し出し方が大そうよい  
 上品な姉と弟の子供こどもがいて  
 いつかなぞはオルガンを奏ひいていた  
 それに  
 顔かほつきの大人おとなしい血色のいい主人しゅじんがいる

もつと立派な煙草屋は千軒もあろう  
 そしておれも煙草を  
 いつもいつもよその店で買ってしまう  
 しかしおれは  
 そのお寺のとりの煙草屋を愛している  
 その小さな店に  
 おれのさぶしい好意を寄せている

## 北見の海岸

沖合はガスにうもれている  
 渚はびっしょりに濡れている  
 その濡れた渚に黒い人影が動いている  
 黒い人影は手網を提げている  
 黒い人影は手網をあげて乏しい獲物をたずね  
 ている

黒い人影は誰だろう  
 黒い人影はどこから来ただろう

獲物はいつも乏しかろう  
 部落は定めし寒かろう  
 そして妻子の間にも話の種が少なからう  
 そして彼の獲物は売れようか  
 彼の手にも銭が残ろうか  
 いいえ  
 彼は黙ってこここの海岸を北へ北へと進むだろ  
 う

手網を提げて  
 妻子を連れて  
 そして家畜も連れなないで

やがてはここを汽車が通るようになるかも知  
 れぬ

大きな建物が立って

高い煙突から黒い煙が上がるようになるかも  
 知れぬ

そして賑やかな油ぎった歓声がわき上がるか  
 も知れぬ

その時

黒い人影はどこにいるだろう

彼の息子や娘はどこにいるだろう

彼らは病気をせぬだろうか

そして医者があるだろうか

彼らは死なぬだろうか

黒い人影はどこから来ただろう

黒い人影は濡れている

## 豪傑

むかし豪傑というものがいた  
 彼は書物をよみ  
 嘘をつかず

みなりを気にせず

わざを磨くために飯を食わなかった  
 後指をさされると腹を切った

恥しい心が生じると腹を切った

かいしゃくは友達にしてももらった

彼は銭をためる代りにためなかった

つらいという代りに敵を殺した

恩を感じると胸のなかにたんだんでおいて

あとでその人のために敵を殺した

いくらでも殺した

それからおのれも死んだ

生きのびたものはみな白髪になった

白髪はまっ白であった

しわが深く眉毛がながく

そして声がまだ遠くまで聞えた

彼は心を鍛えるために自分の心臓をふいごに

した

そして種族の重いひき臼をしずかにまわした

重いひき臼をしずかにまわし

そしてやがて死んだ

そして人は死んだ豪傑を 天の星から見分

けることができなかった

## 夜明け前のさよなら

僕らは仕事をせねばならぬ  
 そのために相談をせねばならぬ  
 然るに僕らが相談をすると

おまわりが来て眼や鼻をたく  
そこで僕は二階をかえた  
路地や抜け裏を考慮して

ここに六人の青年が眠っている  
下には一組の夫婦と一人の赤ん坊とが眠っ  
ている

僕は六人の青年の経歴を知らぬ  
彼らが僕と仲間であることだけを知っている  
僕は下の夫婦の名前を知らぬ  
ただ彼らが二階を喜んで貸してくれたことだ  
けを知っている

夜明けは間もない  
僕らはまた引越すだろう  
靴くつをかかえて  
僕らは綿密な打合せをするだろう  
着々と仕事を運ぶだろう  
明日の夜僕らは別の貸布団に眠るだろう

夜明けは間もない  
この四畳半よ

コードに吊るされたおしめよ  
煤けた裸の電球よ

セルロイドのおもちゃよ  
貸布団よ  
蚤蚤よ

僕は君らにさよならをいう  
花を咲かせるために

僕らの花  
下の夫婦の花  
下の赤ん坊の花  
それらの花を一時にはげしく咲かせるために

### 東京帝国大学生

顔の黄色いのがいる  
眼鏡めがねがいる  
羽織うぎ

るばしか

釦ボタンの直径が一寸もある外套えきがいる

乞食こじきのようなものもいる

そして銀座ぎんざをあるく

酔うと卑いやしいお国言葉うんこをわざとつかう

学問がくもんの蘊奥うんおく

人格じんかくの陶冶とうぎ

そして

『苦悶くもんの象徴』はちょっと読ませるね  
へどだ

そして正門せいもんのあたりをぞろぞろと歩いている  
ふっとぼおるばかり蹴きっているものもいる

### 道路をきずく

道路をきずくために人は砂利を煮る  
道路をきずくために人はバラスを練る  
そしておれたちのきずくのはあの道路だ  
そしてそのためにおれたちは砂利を煮よう

そのためにおれたちは砂利を煮よう  
そのためにおれたちはミキサを廻ひそう  
そのためにおれたちはルラを曳ひこう  
おお そのためにおれたちは巨大な釜かまをすえ  
ブルと専制とのいっさいをたたきこみ  
それをどろどろの道路築造材料にまで煮あげ  
よう

その巨大な釜のなかに  
寛容と哀憐とのいっさいをたたきこみ  
悔くいるところなく煮殺なそう  
道路をきずくために  
その広濶な道路の上を完まっき人間にんげんをして進まし  
めるために

### 思える

円太郎は躍るのであった  
私のからだは真鍮の棒にとびつくのであった  
カーヴにかかると彼女は  
ふくれた紅い手を窓からさし出すのであった  
それをその上につた雪が溶けて紫色にする  
のであった

なぜあの手を手袋が包まぬでしょう